

# 特選 1席

(選者五十音順  
題詠・自由題の順に掲載)



## ● 有馬 朗人 選

小寒の三輪山裾に蹴鞠の音  
音もなく流るアマゾン鳥雲に

宮城 幾世橋 廣  
ブラジル 広田 ユキ

## ● 稲畑 汀子 選

山荘の不自由といふ涼しさよ  
どどどつと負ける綱引運動会

東京 草野 准子  
大阪 楽満 永子

## ● 今井 聖 選

ケーブルを止めいかづちの山となる  
時の日の都バス続いてやつて来る

兵庫 高島規容子  
東京 天谷 敦

## ● 宇多喜代子 選

夏座敷より山を見る空を見る  
川幅を残したままの広島忌

福岡 長阿彌美穂子  
愛知 後藤 洋一

## ● 大串 章 選

掛け終へし稲架の彼方に岩木山  
集落があれば墓あり稲稔る

愛知 中山 精三  
石川 船本 峰月

## ● 小澤 實 選

登山靴脱ぎて蹠を取り戻す  
手に絡む鰻一気にひらきけり

山口 末兼 友子  
石川 河端 徳二

● 片山由美子 選

山羊を追ふサリーの少女花菜風  
電話終へまた風邪声に戻りけり

東京境 幹生  
福岡 内海はるか

● 小島 健 選

逝きし子と登りし山も眠りけり  
入道雲 少年棒を持ちたがる

神奈川 野澤 豊子  
神奈川 今井千穂子

● 高野ムツオ 選

堅香子や耀歌の山を目覚めさせ  
田水沸く亡き父母が笑むやうに

千葉 田端 重彦  
岐阜 金井 辰義

● 鷹羽 狩行 選

稲刈つて大和三山際立たす

奈良 田村 英一

● 高柳 克弘 選

夏山の風となるまで遊びけり  
風に刃のあるとも見えず破芭蕉

奈良 田村 英一  
大阪 村上 直子

● 寺井 谷子 選

新涼の山を見し眼を子に戻し  
羊水の中の八月十五日

兵庫 山本あかね  
愛知 香村 庸子

● 夏井いつき 選

火山噴く校庭に干す椿の実  
いにしへの春を透かして鉋屑

鹿児島 西郷 重則  
東京 光村 通子

● 西村 和子 選

手の長き方へ傾く案山子かな  
朝露や石に戻りし開墾碑

大分 中村 宏枝  
埼玉 萩尾 浩

● 坊城 俊樹 選

いつまでもいつまでも在る登山靴  
鳥帰る錨を四方に異人墓

神奈川 小田誠一郎  
神奈川 島原 恵子

● 星野 高士 選

凍傷の指山小屋を叩きけり  
百僧の経に抗ふ千の虫

埼玉 田村 昇  
東京 安松健一郎

● 三村 純也 選

山上の雨月の坊に泊りけり  
蜂あばれ行司待ったの草相撲

東京 辻 梓測  
岩手 岩淵 正力

● 宮坂 静生 選

山滴るひとりひとりに来る夜明け  
寝ころべば乗りませんかと春の雲

福岡 薄 美津子  
埼玉 山田 文子

## 特選二席◆自由題

有馬 朗人選 洪民の森に啄木鳥打つ訝かな 川尻多恵子  
稲畑 汀子選 夫無口菊の話となれば別 澤本 恭子  
今井 聖選 値切られて鰓の色見す鱈売女 石沢 シヅ  
宇多喜代子選 生きてゐる金魚はいつも濡れてゐる 岩本健一郎  
大串 章選 逝く時は花野の中を行くやうに 中曽根祥子  
小澤 實選 穴窯の焚き番腰に熊除け鈴 寺島 麦  
片山由美子選 黎明の雨匂ひ立つ子規忌かな 瀧宮 虎風  
小島 健選 青へ青へ青へ潜る夏の海 斎村 智大  
高野ムツオ選 羊水の中の八月十五日 香村 庸子  
鷹羽 狩行選 兜虫死んで絵日記終りけり 中澤 安子  
高柳 克弘選 目を見よと叱る母の目秋の水 首藤 達也  
寺井 谷子選 夜の白鳥さようならさようなら母よ 守山由美子  
夏井いつき選 瓶の中の手紙のやうに寒にゐる 川崎真樹子  
西村 和子選 一つづつ荷をおろしゆく遍路かな 中村 岷子  
坊城 俊樹選 百葉箱の中の孤独や夏の果て 清島 久門  
星野 高士選 毒茸といへども森の力なり 長谷川 孝  
三村 純也選 爪立ちちて兎の触りゐる花氷 渡川 幸子  
宮坂 静生選 炎天やピッチャーは今深呼吸 井口 直美

特選作品1句について、作者ご本人より辞退のお申し出がありました。